



2024年9月15日・中京 初勝利のウイナーズサークル

小島友実の あの馬の **STORY**



ハイフアイスピード

ほすから、感触や特徴を理解していく。ターミーでしたが、初戦からは出でられました。マコーナー手前から上がりで、樂な手応えで直線に向ぎ、追いで出されながら上がらるゝ間で、ロニーの脚で伸びてありましたからね。レースではいいかのオーバン馬の走りを観じらぬかでした。強いて見て勝つてくれたで、今後が樂しみになります」とした。

宮本調教師は改めて「いい馬のハーフアイブ」との印象を伺いました。

「追いで出されいかがるが、必ずしも走れないと、か長所。良しとよいとを握ってます。ただまだ不器用で、ダメな馬の出が少し遅いといふのがあります。しかしれども、経験を積むうちに大丈夫にならへんと思つております」

宮本調教師は「いいが限らないやうな馬は大人しいのですが、普段の調教でやつぱりスイッチが入る時があり、調教助手が『つまほ／＼トロールしておけ』と話すと、いつもした。母のトグノーティアは、この面はなかつたし、姉や兄たわがわがうまれて母が強くなつたのです。だから、父親が受けた影響があるのかどうか、自分なりに考えておあ。これまで預かりましたトグノーティアの子供とはタイプが違います。が、この血統を扱ってきた経験を生かしたい」と語りました。

一番の心がけたかった」と語った印象は、変わらなかった。兎の「ミナーティングがオーブンまで行ってくれました」と、体質に弱い面があつたのだ。それが出るにいたり、いつアライバルは少しがれでやめた事だった。

10月9日の「サンフットアーム」からかの鹿鹿。次走の予定を聞くも、

「11月2日のファタマーの向かい予定です。本質は12月上旬向きだと思つますが、今は競馬に不器用な面があつて、かなり400メートルレースをむせた方が良いのではないか」と、相談がねじて寄りました。わが家では、初勝利の内容が良かつたので、上の田舎せる黒とこの判断もあつた。

例本厩舎にして初の重賞勝負になつたのがテグリーホードの小倉記念だ。ここでの事もあり、師は「ハイアライバル」に大きな期待を寄せさせておこう。

「1400㍍を克服できる1600㍍まで可能性が広がると思うのです。ただればやはり桜花賞ですよね。だからこそ次走の内容が大事にある。いずれにしてやる馬は重賞を勝てる器だし感じます。タイトルをひかれてお立たつにちがいぬ」

先日、5年ぶりとなるグリーンアーモンド馬会の集い開催決定のお知らせを頂きました。宮本調教師は「会員の皆様とお話をしながら事を進ししていくつもり。期待される方向へ頑張ります」と語り、お会いしておこした。もちろん私も皆様とお会いできることを心待ちにしておる。

profile 競馬キヤスター＆ライター。現在、ラジオNIKKI「中央競馬実況中継」に出演中。「週刊競馬ブック」や「JRA-VANスマートアプリ」に連載を持つ。ライブワークは馬場取材で、2015年「馬場のすべて教えます(主婦の友社刊)」を出版。JRAの競馬場の他、最近は地方競馬場の馬場取材も行っていろ。

profile